



←R：菊住守代司 (Dr.)、永友聖也 (Vo./G.)、梅田啓介 (Ba.)

「マウンテン・ア・ゴーゴー・ツ」以上のエネルギーを感じた「キミトベ」

●10/19にリリースされるシングル曲「キミトベ」は既にライブでも演っていますが、お客さんの反応がものすごくいいですね。明らかに初めて聴いたであろうシチュエーションでも、永友：この曲を最初にライブで演ったのは3月の名古屋だったんです。そのときはまだ全然完成してなくて、詞もメロディも今は違うんですけど、手応えを感じたんですよね。

●あ、そうだったんですか。永友：まだまだ荒削りだったんですけど、僕らがステージから出しているもの以上に反応が返ってきてる感じがして。

●当初はどんな感じの曲だったんですか？永友：今よりももっとインドアなイメージ…DAFT PUNKみたいな。

●は？ DAFT PUNK？永友：ちょっと古いんですけど「ワン・モア・タイム」みたいな。サウンド的にもポコナーやストリングス入れたいというイメージで作った曲だったんですよ。

●そうなんですね。永友：だからライブでどう完成させるかというのは全然考えてなかったんですけど、とにかく名古屋で演ったとき、その日に演った曲の中で一番反応がよくて。

●え？「マウンテン～」よりもですか？永友：そうです。お客さんも初めてだし、ノリとしては探ってる感じもあったと思うんですけど、でもエネルギーとしては「マウンテン～」以上に感じたんですよね。

●なるほど。レコーディングしたのは？梅田：レコーディングは8月です。

永友：それまでライブで練ったり、寝かせたり。●この曲のビートからは80年代テイストを感じますよね。永友：さっき言った「ワン・モア・タイム」と、あとは「ヤングマン」とか「マツケンサンバII」のイメージですね。

●「マツケンサンバII」ですか。…えっと、キャプテンストライダムですか？永友：はい(笑)。ああいう、たくさんの人を巻き込んでいくっていう儼然の曲のイメージにしたくて。だからディスコサウンドで、っていう計算をしたわけではないんですが、1カ所だけ…間奏にサンバのリズムが残ってるんですけど、あれは「マツケンサンバII」の爪痕ですね。一同：(笑)。

“幸福感”というか“全肯定”な感じの曲を作ったか？

●前号の取材で「80年代の音楽はもともと毛嫌いしてた」とおっしゃってました。永友：80年代からの影響はほとんど受けてないと思うんですね。ただ、歌謡曲として自分の中に残ってるというか、自分でCDを買いはじめたからは、意図的に80年代は避けてました。リスナーとしては80年代から72〜3年頃のバンドの音や、もしくはもっと最近のNirvanaみたいなドロドロしたのが好きだったんです。80年代はDaryl Hall & John Oates以外はダメだなという感じだったんですよ。

●(笑)。永友：だから、80年代のおもしろさを最近発見したんですよね。梅田：僕も最初は80年代っぽい大きな音は恥ずかしいと思ってたんです。まあ僕らはそこまで大きさにやらないですけど、最近はアリだなと思って。

●何かきっかけがあったんですか？梅田：多分、ふた昔前くらいに感じるからアリだと思えるのになって。ひと昔前だったらリアルに古くさく感じるけど、そろそろふた昔前くらいになってきたのかなと思います。菊住：僕ももともと、80年代は演奏に人間っぽさを感じなくてイヤだなと思ってたんです。でも、そこに人間っぽさを感じる事ができるようになったというか。ダンスミュージックからニューウェーブを見たときに、すごく生々しいと思えるようになったのがひとつと、あとは

食わず嫌いだっただ部分もありますね。●なるほど。話を戻しますが、そもそもなぜDAFT PUNKやマツケンが出てきたんですか？永友：曲のアイデアとしては、“幸福感”というか“全肯定”な感じの曲を作りたくて。そのイメージが、たまたま80年代の無責任でアッパーなディスコサウンドとリンクしたんです。

●確かに「キミトベ」は、すぐに覚えることができるけど80年代っぽいんですね。永友：酔っぱらっても歌える曲って好きなんですよね。The Rolling Stonesの「Honky Tonk Women」みたいな(笑)、酔っぱらっても歌えるようなお洒落なメロディを作ったかっただんです。

「キミトベ」は、この東京でまっすぐに立つて闊歩したいというバンドとしての宣言

●なるほど。ところで、この歌詞はどういうところから？

永友：去年の5月に宇都宮から東京に引っ越して来たんですけど、改めて自分は九州人だと感じる事がすごく多くて。

●九州人？永友：というか、東京って不思議なところだなと思って。電車に乗ってたりとか、コンビニで買い物してるときとかに、違和感というか、ちょっとスレてる感じがすごく多くて。嫌だと言ってるわけではないんですけど。

●違和感ですか。永友：はい。例えば満員電車に乗ってるときに「こんな人に人が乗ってるのに、ひとりひとりとはなんでこんなに孤独なんだろう」って感じたりとか、自分のももとのルーツ…九州に居たころのこととかすごく考えて。僕は九州人として東京でまっすぐに立つてるつもりなんだけど、「ひょっとしたら自分の方が斜めに立つてるのかな？」って。

●はい。永友：そういう男である“おいどん”が東京に来て闊歩してる感じが歌詞に出てると思います。“おいどん”は開き直ってるんですよ。俺は

まっすぐに立つてるつもりだ”って。

●おもしろいですね。永友：そういうことが、キャプテンストライダムというバンドにも繋がればいいなって。

●バンドにもですか？ということは、バンドとしても違和感を感じてる？

永友：う〜ん、違和感を…感じてますね。「みんな、まっすぐに立たないんだな」っていうことは思ったりしますよ。僕はもともとThe BeatlesやThe Rolling StonesやLed Zeppelinみたいにド真ん中が好きなので、真ん中にドシッと立ちたいんですよ。そういう意味では、表現として曖昧にしてしまうことを反省することもあって。

●なんかキャプテンストライダムの核に触れた気がしますね。永友：こないだのライブで中島みゆきさんの「ホームにて」をカヴァーしたんですけど、改めて自分で演ってみると言葉とかメロディのパワーとかすごかったんですよね。それで、「こういう歌を作りたいな」と思っちゃったんです。飲み込んだ後も小骨がいつまでも喉にひっかかってる感じの歌を。

●伝わる度合いが違うんですか？永友：聴いているときもそうなんですけど、聴いた後にも何かがひっついて残る感じ。忌野清志郎さんとか中島みゆきさん、井上陽水さんとか、やっぱり圧倒的なんですよ。「この人たちと勝負したいな。負けたくないな」と思って。

●なるほど。先ほど“表現として曖昧にすることを反省することもあった”とおっしゃっていませんでしたか。そこをもう少し詳しく訊きたいんですが。

永友：今までは、表現としてわかりやすくするというのが振り幅を大きくする部分と、逆に強いメッセージで伝える対象を限定してしまっ部分、その両方のバランスを取ろうとしてたんですよね。もともと歌詞に普遍性を持たせるにはどうしたらいいか、という悩んで。

●そうなんですね。永友：でも、例えばRCサクセションの「スローバラード」なんてものすごく個人的な内容の歌詞なんですよね。“市営グラウンドの駐車場”での出来事を受けて。その市営グラウンドの駐車場にもちろん僕が行ったことはないけど、この歌を聴くと市営グラウンドの土の匂いが感じられるというか。清志郎さんが実際に経験されたことなのかどうかはわからないんですけど、でもきっと清志郎さんにとって市営グラウンドはリアリティがあったはずなんです。そういうものをぶつけた方が、小骨が刺さるんじゃないかなと。

●表現者としてふっきたんです。永友：ええ。その方が届くと信じて曲を作ってみようかって。

僕は、とまでは煽る感じになってしまっこともあった

●そこに通じる話かどうかわからないんですけど、キャプテンストライダムって器用だと思っんですよ。ライブの話になりますが、音楽以外にもいろんなネタを持ってたり、エンターテインメント全開の曲があったり、MCでも笑わせたり。ただ、僕を感じるキャプテンストライダムのライブの最大の魅力は、理解できない迫力だと思っんです。「もう、わけわかんないけどすごい」っていう。

永友：はい。●特に今年に入ってからはそういう度合いが増えてきていると感じるんです。今回7曲分のライブ映像が入ったDVD付きのシングルなので、そのライブ映像を観ながら「わけわかんないけどすごいと感じるの何か？」を考えてたんで

すよ。細かい部分で言うと、永友くんが左足を上げ始めた瞬間とか、菊住くんの口を開けながらのブレイとか、梅田くんが不敵にベースの弦を指で弾く立ち姿とか。

永友：そういうって大事かも知れないですね。Pete Townshendの大回転ビッキングを観たときのような電気が走る感覚というか。

●はいはい。そういう、その場でしか出ないものですね。梅田：もともと僕はグランジ好きだから、ライブとか観てて楽しいのもいいんだけど、それよりももっとすごい“あの感じ”が好きなんですよね。そういう迫力が出そうと思って出せるものじゃないと思うんです。

永友：あとヴォーカルで言うと、僕はもともと音で歌ってたんですよ。

●音で歌ってた？永友：はい。以前はサウンドの一部のように、キメやブレイクに被る言葉を“音”として強く発したり。でも最近は、ひとつの言葉として歌うように変わりましたね。そうすると、歌の抜けがよくなると思うんです。

●なるほど。あと、今までと比べてっていう視点で言うと、ステージ上の3人は以前よりもお客さんの方を向いてない気がするんです。“お客さんとの対話”という感じではなくて、“3人がステージで音をぶつけ合ってる”ように見えるんですが、そこがいって思ってる。永友：鋭いところを突かれますね(笑)。僕らはとすれば(お客さんに)煽る感じになってしまっこともあったと思うんですよ。「エンターテインメントしよう」とか、それも大事なことなんですけど、でもまずは自分たちが出した音や伝えた言葉をしっかり見つめ直そうと思っって、自分たちなりにまっすぐ立とうと。アナログフィッシュとかミドリカワくん(ミドリカワ書房)なんかは、僕はすごく好きなんですけど、彼らも彼らなりの立ち方でまっすぐ立っるんですよ。その様に共感するんですよ。バンドとしてはそこを曲げちゃダメだって。

●なるほど。それが「キミトベ」に通じるの、ライブにも繋がってるんですね。永友：そうです。

来年の2ndアルバムは、“おいどん”が縦横無尽に闊歩している感じですよ(笑)。

●おお！永友：「キミトベ」のレコーディング以降、完全にアルバム制作モードに切り替わったというか。制作チームもエンジニアさんも「キミトベ」から布陣を変えて。編曲で大平太一さんに入ってもらってるんですが、この方は僕らが東京で一番最初にレコーディングしたときのディレクターなんです。それで最近、何年かぶりにライブを観ていただいたんですが、「いろいろ気づいたことがあったから話したい」って言われて、家にお邪魔したんです。そのときは一緒に仕事をすとしてかそういう話は全然なかったんですけど、すごく具体的にアドバイスをいただいて。それがよくて、「キミトベ」から大平さんと本格的にやってみよう。

●大平さんからは具体的に何をもらってるんですか？永友：理論的な話とか。あとは、曲がある上で言葉に乗せる場合と、言葉が先にあった上で曲

を作り上げる場合との違いであるとか。「言葉が先にあった方が絶対にパワーが出る」と言われて。僕は聞いた前で作ってたんですけど、詞先で曲を作ってみたりして。

●なるほど。永友：そうすると、自分がいっつも作ってるメロディとか足りなかったりとか、多すぎたりとかするんですよ。メロディと言葉のつじつま合わせというか、そこをどう落とす前をつけるか工夫して。そして今までの自分のクセみたいなのもから外れた曲が出来たりして。おもしろいんですよ。

●アルバムは非常に楽しみですね。そしてその前に、「キミトベ」リリースと同時にツアーが始まりませんか？

菊住：宇都宮と大阪と渋谷ではワンマンなんですけど、「キミトベ2005」というツアータイトルですが、「キミトベ」だけじゃなくて2ndアルバムに入る予定の新曲をたくさん演っていきたいと思ってるんです。

●わかりました。では最後にメッセージを。梅田：DVD観たら絶対にライブ来たくなると思っるんですよ。…会場で待つてます。

菊住：「キミトベ」も今作ってる新曲も、「いかに曲を伝えるか」を重視して、極めて素直にアレンジしてっるんです。だからライブで観てもらったら必ず何かしら感じる事が出来ると思っているので、お楽しみに。

永友：ツアーではいろいろな美味しい料理を出したいと思っています。ちょっと小骨が刺さるかも申しませんが、食べに来てください。

一同：(苦笑)。永友：上手いんだか上手くないんだかよくわからない例えしちゃった…。

interview：Takeshi.Yamanaka

ツアー「キミトベ2005」

10/17	金沢 VAN VAN V4
10/18	富山 club MAIRO
11/11	広島 ナミキジャンクション
11/12	福岡 DRUM SON
11/14	岡山 ベバーランド
11/20	宇都宮 HEAVEN'S ROCK (ワンマン)
11/26	札幌 ベッシーホール
11/27	仙台 PARK SQUARE
11/28	福島 CLUB SONIC IWAKI
12/01	名古屋 徳三
12/02	大阪 十三ファンダンゴ (ワンマン)
12/09	渋谷 CLUB QUATTRO (ワンマン)

イベント情報

「FANDANGO 18th ANNIVERSARY」

10/02 大阪十三ファンダンゴ

「熱血！スペシャル中医学園祭2005
～初冬キロップン～」

11/05 ラフォーレミュージアム六本木

RADIOレギュラー

TOKYO-FM 80.0MHz 「BUZZ ROOM」
毎週木曜21:30～22:00 (10/6 スタート)

single+Live DVD 「キミトベ」

風待レコード/SMART CD+DVD 2枚組 (ライブ映像7曲分収録)
AICL-1660/1661
¥1,529 (税込)
2005.10.19 Release

http://www.captain-a-gogo.com/